

大甕小学校通信

令和元年度 10月号
文責：大甕小学校長 林 典行

原町区小・中学校音楽祭 ～地域のまごころに込めて～

金木犀の香りがどこからかただよってくる季節となりました。いよいよ、秋本番です。学校は、目下「芸術の秋」でしょうか。どの学年も学習発表会に向けた取組みが本格的に始まり、劇やダンス等の練習に集中して励んでいる姿が見られます。

それに先んじて、令和元年度原町区小・中学校音楽祭が、11日（金）南相馬市民文化会館（ゆめはっ）で開催され、本校では5年生が出場します。音楽祭では、「（合奏）相馬盆唄」「（合唱）にじいろ」を披露します。

特に、「相馬盆唄」は、1学期から、地域の皆さまに、螺貝や篠笛の吹き方、和太鼓のたたき方、お囃子の入れ方など、ていねいにご指導いただきました。子どもたちには、担任を含め、多くの教員の熱心な指導があってからこそ当日を迎えることができるというのはもちろんですが、地域の皆さまの、子どもたちに対する「まごころ」が寄せられているのだということを確認させたいと考えています。

音楽祭では、5年生が奏でる「まごころ」のこもったすばらしい音色（ハーモニー）が会場に響きわたることでしょう。保護者の皆さまも含め、多くの地域の皆さまのご来場をお待ちしております。



ことばのキャッチボール

このところ、連日のように「いじめ」に関する事案が、新聞やテレビのニュース番組で報道されています。そのような痛ましい記事やニュースに触れるたび、教育に携わる者の一人として、心苦しく、そして忸怩たるものがこみあげてきます。本校でも、「いじめアンケート」を実施しているところですが、「悪口」や「からかい」といった事案は毎月あがってきます。

人に意地悪したり、からかったりすることで自分の気持ちがすっきりする、楽しいと思うことは、自分の心に悪い種をまいてしまっていると言えます。友だちを傷つける言葉を最初に聞くのは自分自身です。相手ではありません。相手に聞こえるようにいやなことや意地悪を言った場合、その言葉を最初に自分が聞いたことで、自分自身を卑下し、尊厳を傷つけているのだということ、子どもたちなりにしっかり認識させたいと考えております。

昨今の子どもたちは、取っ組み合いの喧嘩よりも言葉によるトラブルが多いようです。心地よい言葉は、すうっと流れてしまいます。しかし、嫌な言葉は確実に相手の心につきささります。人間関係を培ううえで「言葉」の果たす影響は計り知れなく、慎重に扱わなければいけないことを今の時期にしっかり自覚させることが大切です。

ところで、言葉による投げかけは、「ドッジボール」や「キャッチボール」に例えられることがあります。「ドッジボール」で相手に向かってダメージを与えるように「強く・速く・激しく・きつく」投げるような言葉では、相手の心には届きません。「キャッチボール」で相手が捕りやすいように「優しく・受け止めやすく・相手と目を合わせて」放るような言葉の方が相手の心に響きます。



まず、我々大人が「優しく、やわらかく、あたたかい言葉」を子どもたちに届け、子どもたちを育てていけたらと思います。こうした言葉こそが、自分自身や相手といった「人の心」を変える力を持っているのではないかと考えます。

もちろん、大人同士の人間関係も同様です。大人は、子どもたちの手本として振るまわなければいけないこと、これは昔も今も不易です。